

日本と私 ～ 日本研究の展望

ベン＝アミー・シロニー

はじめに

本日、私がこちらで講演させていただくことを誠に光栄に思っている次第である。このたび、このような名誉ある賞を与えて下さったことに私は国際交流基金、ならびに小倉理事長に厚くお礼を申し上げたい。国際交流基金は、世界で行われている日本研究の振興に大きく貢献しており、私を含めこの分野で活動している者は皆、国際交流基金の働きに感謝している。ヨーロッパ日本研究協会の理事長をかつて務め、この賞をすでに受賞され、日本社会と日本文化の研究の第一人者と称されるヨーゼフ・クライナー (Josef Kreiner) 教授には、今回、この講演の司会を務めていただき感謝の念にたえない。本日、この講演が国際文化会館で開催されることを、とても喜ばしく思っている。私は 30 年前にこの会館の会員になったので、私にとって今も特別な存在なのである。

なぜ、日本を研究するのか？

私たちは外国人として日本研究に従事しているが、「なぜあなたは日本を専攻対象に選んだのですか？」という質問を絶えず受ける。医学や英文学を研究している人たちはそうした質問を受けることはないと思う。日本に関心を抱く者の気持ちは、そうでない者にとって分かりにくく、分かってもらうためには少し説明することが必要である。こうした質問に対し、私たちは決まり文句のような回答を用意している。しかし、日本に興味を抱いたきっかけを思い起こしてみれば、それは偶然にそうなったとしか言いようがないと考える人は私たちの中に多いことと思う。たまたま日本の奨学金を受けることになって日本にやってくるとか、子どもの頃に日本に関する書物を偶然読む

機会があり、それ以来興味を抱くようになったというパターンが多い。全くの偶然で日本に触れたのだとしても、この研究分野に足を踏み入れてしまえば、それがとても刺激的で味わいがあり、やりがいのある分野であることに気づく。この分野に専心することで、私たちはそれまでにない新しい視野と見識を獲得している。そして私たちの多くは、この分野の研究を楽しみながらやっているのである。研究対象を好きになっても、必ずしもそれを深く理解することにはつながらないが、研究活動がより楽しくなることは確かである。私の場合、正直に申し上げますと、日本を訪れて地元の人々と触れ合い、芸術に触れ、季節の移り変わりを目にし、音楽に耳を傾け、食を堪能し、露天風呂につかることが楽しくてしょうがない。日本語が習得の難しい言語で、次から次へと学ぶべきことが生じるからこそ、私はこの言葉が好きなのである。また、私が日本人に日本語で話しかけると彼らはとても喜んで応えてくれることも私がこの言葉を好きになった理由である。私にとってヨーロッパの言語は習得するのがやさしいので、それらの言語を学んでいたらさぞかし物足りなさを感じていたかと思う。こうした理由で、日本を研究する外国の研究者たちは日本語がアルファベットという表音文字を採用し、私たちにとって習得が難しい美しい漢字を廃止すべきだという考えに反対しているのである。

日本の歴史を教えることで、私は新しい視野を開拓することができた。私の友人の中には、研究には熱心だけれども、教えることが嫌いな人が何人かいる。私はどちらの仕事も好きだ。好奇心で胸をふくらませ、新しいことを学ぶ喜びの表情を浮かべながら熱心に私の講義を聴いてくれる新入生たちと向き合い、時には彼らの笑いを取りながら講義を進めることは、私にとってやりがいのある仕事であった。大学院の学生と歴史をテーマに討論する場合は、私もより熱心に考えを巡らせることが必要であった。しかし、いつでも私に刺激を与えてくれたのは日本の研究であった。では、次に私が実際にどのようなテーマについて研究したのかをお話したい。

原爆の投下

私が日本に興味を持ち始めたのは 45 年前のことである。当時、私はエルサレム・ヘブライ大学で歴史学の修士論文を執筆していた。テーマは広島と長崎への原爆投下であった。私は、原爆の投下が劇的な出来事であると同時に倫理的な問題を提起する出来事であったため、これを論文のテーマに選んだ。私は、歴史とはいつでも人々が観客であると同時に演じることを求められる一つのドラマのように思っていた。このドラマの中で、人々は判断を下すことが求められる。こうして倫理的な問題について人々は向き合うことを余儀なくされる。広島と長崎への原爆の投下は大きな悲劇であったといえる。一度に 15 万もの人々が犠牲者になってしまったのである。原爆の投下によって太平洋戦争が終結した。しかし、この結果、東アジアに冷戦構造が生じ、核兵器による軍拡競争が始まるのだった。このため、現在ではこの原爆の投下が本当に必要であったのかについて問うことができる。

トルーマン大統領は、50 万人のアメリカ軍兵士、数百万人の日本軍兵士、およびアメリカ軍による本土上陸作戦が行われていれば命を落としていたであろう無数の民間人の生命を救うことができたとして、原爆の投下を正当化した。しかし 1945 年 8 月、日本の国土は廃墟と化す。帝国海軍の艦隊は海底に沈み、アメリカの爆撃機は日本の都市を壊滅させ、抵抗できない状態にした。一方、日本はソ連に対し名誉ある降伏を仲介するように熱心に働きかけていた。このとき、日本はすでに諸外国に何ら脅威を与えていなかったのだが、アメリカ軍の本土上陸作戦の敢行が 11 月に予定されていた。原爆は、ヒトラーの世界征服を食い止めるための最終兵器として開発されたのだった。原爆は、敗戦が決定的となった国の最後を早めるために開発された武器ではなかったはずである。

驚いたのだが、当時、アメリカ軍の上級司令官たちの多くは原爆の使用は必要ではないと考えていた事実を私は突き止めた。ダグラス・マッカーサー將軍はある記者に対し、原爆投下に正当性は見出せないと言っている¹。チェスター・ウィリアム・ニミッツ提督は 1946 年にナショナル・ジオグラフィック

協会とのインタビューで、日本は原爆が投下されていなくても降伏していただろうと語っている²。ドワイト・アイゼンハワー元帥はヘンリー・スティムソン陸軍長官に原爆の投下は「全く必要なかった」と語っている³。アメリカの戦略爆撃調査団は、1946年の報告書の中で日本は原爆が投下されなくても1945年末までに降伏していたであろうと述べている⁴。こうした理由で、トルーマン大統領は原爆を投下させる前に軍司令官に助言を求めようとしなかったのであろう。

では、彼はなぜ原爆投下に踏み切ったのか？ 私はその論文の中で、原爆の投下は第二次大戦という時代を背景にして考えるのではなく、ヨーロッパですでに始まっていた冷戦構造を背景にして考えるべきであると結論付けた。トルーマン大統領は、ソ連がすでにヨーロッパで行っていたように、アジアにおける戦争に介入して領土を奪うことを阻止する目的で日本に早く降伏してもらうことを望んだのだった。皮肉なことに、広島に原爆を投下したことでソ連の戦争への介入が早まり、次の日には日本に宣戦布告している。広島への原爆投下は、トルーマン大統領が恐れていた行為、すなわち中国、朝鮮半島、および北太平洋の広い地域への進出へとソ連を刺激した。この結果は現在の国際情勢にも大きな影響を及ぼしている。このように、冷戦構造を背景にして考えた場合でも原爆の投下は非生産的な行為だったのである。

二・二六事件

ヘブライ語で書いた修士論文を提出する前に、私は幸運にも日本の文部省（当時）から奨学金を得る機会に恵まれた。1965年秋、私は日本を訪れ、ICU（国際基督教大学）で2年間にわたり日本語を学んだ。当時、この大学には言語教育を担当する充実した教授陣が配置されていた。1967年、私はイスラエルに短期間滞在した後、マリウス・ジャンセン（Marius Jansen）教授のもと博士号（Ph.D.）を取得する目的で米国のプリンストン大学に渡った。ジャンセン教授は日本の幕末期の専門家で、理想主義を掲げ日本が明治維新

を迎える前に命を落とした若き志士である坂本竜馬についての著作を残している。私は博士論文のテーマとして、「昭和維新」を目指し、1936年2月26日にその幕末の志士に習って青年将校たちが起こした二・二六事件と呼ばれる叛乱事件を取り上げることにした。私がこのテーマを取り上げたのは、修士論文を執筆したときと同様にこの事件が劇的かつ悲劇的であると同時に、倫理的な問題を提起する出来事であったためであった。

1969年、私はこのテーマについて調査するため、日本に戻り資料を集め、処刑された叛乱軍の兵士の血縁者や友達に直接話をうかがった。この結果、教科書に説明されている内容とは異なる事件の有様が明らかとなった。叛乱を起こした青年将校たちは複数の重要人物を殺害したテロリストとされているが、現代のテロリストとは異なり、事件に関係のない人々には危害を加えなかった。軍事政権の樹立を望んでいたという点で彼らは軍国主義者であったわけだが、彼らが掲げていた主な目的は貧困に苦しむ農民を救い、巨大な企業（財閥）が持つ力を抑え込もうとする社会的なものであった。彼らは腐敗し不実なる存在であると考えた当時の体制の転覆を図ったが、自分たちが権力を掌握し、新しい支配者になろうとは考えなかった。彼らはヨーロッパに台頭していた全体主義的な体制に感化されていたが、ファシズムも共産主義も西洋のいわゆる邪悪な思想であるとして拒絶した。彼らは思想的な指導者であった北一輝に従い、アジアをイギリスやソビエトの植民地主義から解放することを目指す一方で、中国とアメリカを日本の同盟国として見なしていた。

戦後、処刑された青年将校たちの血縁者と友達は、この叛乱が成功していたのなら、日本は中国もアメリカも攻撃することはなかったであろうと語っている（このことは未だ謎であるが）。この叛乱事件にはいくつかの謎が付きまとっている。例えば、叛乱軍と三井財閥との秘密のつながり、叛乱軍と天皇の弟である秩父宮雍仁親王（ちちぶのみや やすひとしんのう）とのつながり、「邪悪な側近者」から昭和天皇を解放するための叛乱に反対の立場をとった昭和天皇に対する叛乱軍の怒りである。この事件に関して私は1973年に

著作を出版し、叛乱が失敗したときに病院で切腹により自害した将校の一人である河野 寿（こうの ひさし）大尉の兄、河野 司（こうの つかさ）によって日本語に翻訳されている⁵。

戦時下の日本

1936年に起きた4日間にわたる劇的な叛乱事件の次に私が関心を向けたのは、4年にわたり繰り広げられた太平洋戦争であった。当時の政府が「大東亜戦争」と呼ぶこの太平洋戦争は、歴史家が「15年戦争」と名付ける時期に起きた最大の戦いであった。正確には、この時期は1931年9月に起きた満州事変から1945年の日本の敗戦までに至る14年弱の期間を指す。日本の歴史家たちは、この時期のことを「暗い谷間」という表現で適切に形容している。日本はナチスドイツとイタリアファシズムの側に立ち戦っていたわけだが、当時の日本の体制は「日本ファシズム」、「軍国主義ファシズム」、および「上からのファシズム」と呼ばれた。ファシズムには数多くの定義があり、歴史家たちはこの言葉を独裁主義的かつ攻撃的なあらゆる国家体制に適用する一方で、独裁主義的かつ攻撃的であっても共産主義国家にはこの言葉を適用していない。私は戦時下の日本の体制を同じ時期のドイツとイタリアの体制と比較したが、その結果大きな違いが存在することが判明した。日本軍は中国と朝鮮半島で残虐行為を行ったが、反中国人、あるいは反朝鮮人といった思想を掲げていたわけではなかった。日本軍に協力的な中国人や朝鮮人は好待遇を受けていたのだ。これに反し、ナチス占領下のヨーロッパのユダヤ人たちはドイツへの忠誠心の有無に関係なく捕らえられ、殺害されているのだ。

戦時下の日本は専制主義的な国家であり、国民を抑圧していたが全体主義国家ではなかった。国民生活の隅々まで監視する政権政党は存在せず、大衆を扇動し、決定を下す神格化された独裁者は存在しなかった。東条英機陸軍大将は大きな権力を振るったが、ヒトラー、ムッソリーニ、スターリン、ある

いは蒋介石と比較すればはるかに小さな存在であった。戦時下で民主的な国を指導したルーズベルトやチャーチルと比較してもその存在は小さかった。東条英機は海軍も文民官僚もあやつることはできなかった。これらの機関は独立性を堅持していたのである。1944年にサイパンが陥落すると、彼は責任をとって辞任した。彼の後を引き継いだ小磯國昭陸軍大将の権力はさらに限られたもので、アメリカ軍の沖縄上陸を機に辞任を余儀なくされた。この戦争に参加した国で指導者が二度も、しかも整然と交代した国は他にない。

さらに、この戦争が始まった当初、知識階級、作家、および芸術家はこの戦争を熱狂的に支持していた事実が明らかとなった。これらの人々は偏狭な軍国主義者ではなかった。彼らは欧米式の教育を受けており、彼らのうちの数名は左翼的な思想の持ち主であった。彼らは日本が世界を征服すべきだと考えて戦争を支持したわけではなかった。彼らは日本がアジアを西洋の支配から解放するために戦争を始めたと考えたのだった。今でこそ、私たちは彼らの認識が誤っていたと考えることができるし、日本が西洋の帝国主義に代えて自分たちの帝国主義を振りかざしてアジアを支配しようとしたことを明白な事実として知っている。しかし当時は、この事実を明確に把握することができず、多くの人々は国家から伝えられる公式な情報だけを信じるしかなかったのである。たとえ自分の見解を抱いても、人々は心の中にしまっておいた。共産主義者は逮捕され、裁判にかけられ投獄された。彼らの中には獄中で暴行を受けた結果、死亡している者もいる。しかし、処刑された者はいなかった。共産主義者の指導者の多くは戦時下の日本を生き抜き、戦争が終わると再び政治の表舞台に登場した⁶。

日露戦争

第二次大戦が行われていた時代の日本について研究した後、私の関心はそれから40年も遡って起きた日露戦争に向けられた。この戦争で勝利したことが、日本を太平洋戦争へと向かわせた。多くの人々が、これら二つの戦争に類似

性を見出したのだった。どちらの戦争も、自国の安全を脅かす西洋の強国を相手にした戦争であった。またどちらの戦争でも、日本はヨーロッパの列強の同盟国として戦った。さらにどちらの戦争でも、日本は物資面で劣っていたが、そうした状況を不屈の精神で補った。このため、日本は再び勝利を収めることができると信じたのである。しかし、歴史は繰り返さなかった。1904年、日本は大きなリスクを背負って帝政ロシアに攻撃を仕掛け勝利した。1941年、日本は再び大きなリスクを背負ってアメリカを攻撃したが、敗北した。

日露戦争は20世紀に入って最初に起きた国際紛争で、以後進展してゆく世界情勢の舞台を形成することになる。この戦争は第一次大戦への道を開き、ロシア革命へとつながり、アジアにおける日本の侵略政策を加速させ、反植民地主義の動きが世界中で高まった。この戦いでは新しい兵器が導入され、それ以降の戦争では大規模な地上戦や海上戦が行われるようになった。熾烈な戦いではあったが、この戦争は紳士的な方法で行われた最後の戦争であった。すなわち戦争に関する規定が忠実に順守され、捕虜も適正に扱われた戦いなのであった。

日露戦争で日本が勝利すると、1453年にビザンティン帝国の首都コンスタンティノーブルがオスマントルコ軍によって陥落して以来、再びアジアの国家がヨーロッパの列強を倒したとしてヨーロッパ以外の地域で日本は称賛されることになった。しかし当時、日本はそのようなことに関心を向けていなかった。1904年から1905年にかけて、日本が目指していたのはアジアの解放ではなく、当時アジアを支配していたヨーロッパの列強に加わることだったのである。当時、日本はその戦争を、進んだ文明を持つ国による文明が遅れた国に対する戦争であると考えていたのである。それは日本の願望を反映した見方ではなかった。20世紀初頭、日本は多くの点でロシアよりも近代化が進んでいた。日本には憲法が定められ、選挙で選ばれた衆議院議員による帝国議会が存在し、政党が存在し、言論の自由もある程度認められていた。その一方で、ロシアにはこれらすべてが欠けていたのである。当時の日本の

識字率はロシアのそれよりも高く、兵士も自分が戦う目的をよく理解していた。これが東洋と西洋との間の戦いであったのなら、明らかにロシアは東洋で日本は西洋であったのである⁷。

日露戦争は植民地戦争であった。しかし西洋は当時、アジアに近代化をもたらしているように見えた日本の植民地政策を好意的に見なしていた。最も露骨な日本の植民地主義は、今から丁度 100 年前の 1910 年に韓国併合という形で実践された。今日において極めて公平な見方をすれば、この行為は朝鮮半島の人々の独立と尊厳を奪う露骨な侵略行為として映る。しかし、100 年前の世界情勢は今とは大きく異なっていた。産業の発展のためには植民地が必要不可欠であり、植民地政策が行われることで植民地で暮らす人々の生活が豊かになるとの想定のもと、アジアとアフリカでは先進工業国が途上国を支配していた。このため、朝鮮半島の併合は植民地を保有していた西洋諸国によって歓迎されたのである。日本による朝鮮半島の支配は、英国によるインドの支配、あるいはフランスによるインドシナの支配と何ら変わりがなかったのである。

ユダヤ人と日本人

日露戦争の研究が、私にユダヤ人と日本人との関係性を探るきっかけを与えてくれた。この戦争では数千人のユダヤ人がロシア側で戦い、命を落とし、日本側で戦ったユダヤ人は全くいなかったわけであるが、世界中のユダヤ人は日本を支持し、その勝利を称賛した。この理由の一つとして、当時、帝政ロシアではユダヤ人が迫害されていた事実が挙げられる。もう一つの理由として、ユダヤ人が日本のめざましい発展に称賛の念を抱いていた事実を挙げることができる。ユダヤ人が日本に対して示した共感の実例として、ニューヨークのユダヤ人銀行家ジェイコブ・シッフ (Jacob Schiff) がアメリカとイギリスへの日本の貸付金負担を引き受け、これによって日本が戦争に勝利できたというエピソードを挙げることができる。

明らかな違いはあるものの、私はユダヤ人と日本人が多くの特質を共有している事実を見つけた。両民族は外国の影響を吸収しながらも民族の中核的な価値観は失わずに今日に至るといふ驚くべき歴史的持続性を持っている。どちらの民族も強い自己認識、学習意欲、卓越性を得ることへの野心、および知的好奇心を備えている。東ヨーロッパに存在した閉鎖されたユダヤ人共同体の壁と、東アジアで鎖国を行っていた日本の壁が 19 世紀に崩れたとき、両民族は豊富なエネルギーと才能を持って西洋の世界になだれ込み、二世代の間に最高水準の西洋科学、力、および富を持つに至った。

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて起きたこれらの 2 つの非キリスト教民族の驚くべき躍進は、キリスト教世界に疑念と恐れを生じさせた。反ユダヤ主義と反日本主義の根源には類似性があり、しばしば同じ人物によって唱えられている。ドイツ皇帝ヴィルヘルム II 世は、無実のユダヤ人大尉が反逆罪で起訴されたドレフュス事件がフランスで起きたとき「黄禍論（おうかろん）」、すなわち黄色人種脅威論を唱えた。ロシアでユダヤ人迫害を推し進めたロシア皇帝ニコライ II 世は国を日本との戦争に導いた。人道主義の立場に立つ作家レフ・トルストイでさえも、ユダヤ人と日本人を西洋のキリスト教世界にとって敵であると表現している⁸。

戦前、日本にいたユダヤ人は極めて少なかったが、西洋から様々なものが輸入されるにつれ、反ユダヤ主義的な文献も日本に入ってきた。日本人は西洋における反ユダヤの思想に衝撃を受けたが、ユダヤ人の功績には畏敬の念を抱いていた。1922 年にはアルベルト・アインシュタインが日本を訪れ、1920 年代から 1930 年代にかけては演奏と音楽教育のためにユダヤ人の音楽家たちが日本を訪れ、彼らはいずれも温かく迎えられた。私たちにとって、ユダヤ人に対する肯定的、および否定的な固定観念が混在することに矛盾を感じるのだが、日本人はこのことに矛盾を見出さないのである。神道の世界に登場する怨霊のように、ユダヤ人は大切に扱えば有益な存在となり、粗末に扱えば有害な存在となると考えられていたのだ。実際、日本の反ユダヤ的な著述

家も実はユダヤ人に強く敬服していた。1940年、軍国主義であった日本は、ナチスが支配するヨーロッパから難民となって逃げてきたユダヤ人を米国や英国よりも多く受け入れ、救っている。

天皇制

日本人とユダヤ人の歴史に見られる歴史的連続性に対する私の関心は、やがて日本の天皇に向けられるようになった。日本の天皇家は5世紀ごろに国家が誕生してから現在まで続く世界最古の王家である。天皇家は日本人が認める唯一の王家で、苗字すら存在しない。この血筋は天皇が権力を振りかざしたり策略をめぐらしたりすることなく、国民の支持と尊敬の念を得て存続されてきたのである。王や皇帝が国を支配していた他の国々とは異なり、日本の天皇は国の支配者ではなかった。天皇は国を統治することも、軍をあやつることも、戦争を行うことも、政策を適用することも、決断を下すことも、信仰に関する法令を定めることもなかった。ただし、天皇の座から退いた後、院政を行って影響力を及ぼすことは偶々あった。

日本の天皇を個人として見るのなら、とても弱い存在であった。彼らは天皇の座から下ろされ、追放され、時には殺害される可能性すらあった。しかし、家族として、王朝として、さらには制度として見るのなら、彼らはとても強固な存在であった。誰もこの王家を引き継ぐことも、政略婚姻で奪うこともできなかった。こうした弱い存在である天皇と強力な王家という二つの存在は、一つの謎を投げかける。この制度は一体、どのようにして機能していたのか？ 中国や他の国々にいた独裁的な指導者のように、平清盛、源頼朝、豊臣秀吉、あるいは徳川家康といった強大な力を持った者がなぜ天皇の座を奪って自らを天皇と名乗らなかったのか？ こうした人物が、武器を持たず、自己主張をせず、時代によっては幼児であった天皇に服従したのか？

日本では天皇は神とされているため、天皇をその座から下ろすことはできなかったのだとしばしば主張される。人が神を退位させることはできるのか？ 実際には、それは可能であった。神聖な地位を持っていたものの、日本の天皇はしばしば退位を余儀なくされている。およそ半数の天皇が、崩御の前にその座から下りている。こうした現象は他の国には見られない。また、八百万（やおよろず）の神々がいるとされる国では、人はいともたやすく神になることができる。この国では、人は誰でも亡くなれば神、あるいは仏になる。日本の天皇は「人の肉体に宿った神（現人神）」であった。しかし、奇跡を起こす「生き神」も他に存在していた。日本の天皇が持っていた神格性は、エジプトのファラオやローマ皇帝が持っていたそれよりもレベルが低いものであった。天皇が活着している間は天皇のために神社が建立されることもなく、生贄が捧げられることも、また祈りが捧げられることもなかった。また天皇が他の国の神格化された王たちのように奇跡を起こし、病人を癒し、あるいは未来を見通すことは求められていなかった。

天皇家が今日まで続いているもう一つの理由として、外部の者にとって、天皇の地位を奪うよりも天皇を利用したほうが好都合であったことが挙げられる。これは事実であるが、こうした事実がなぜ日本にだけ見られるのであろうか？ 他国では、権力を手にした者は必ず王位も得ることを望んだ。国を統治していた貴族や武将は、中国やヨーロッパの同等の地位の者たちと比較して野心や自己主張に乏しかったのであろうか？ 私はそのようなことはないと思う。私には、自分たちが天皇の座を奪ったところで社会の人々に受け入れてもらえないことを彼らが十分に知っていたためであるように思える。天皇家は、社会からの尊敬の念と支持を集めたからこそ存続できたのである。では、そうした尊敬の念と支持はどこから生まれるのか？

私はこの問いに対する確かな答えを見つけたわけではないが、性別因子に着目した。日本の天皇の多くは男性である。しかし、その神聖さは女神の先祖、天照大神という神から引き継がれたものである。天皇の受動的な態度、政治や行政への不参加、儀式や芸術への関わり、および女性の従者を従えている

ことが、天皇の人物像を父親的というよりは母親的なものにした。明治維新後、日本政府は天皇に男性的なイメージを持たせようと努力した。外国の国王のように、明治天皇、大正天皇、および若年の頃の昭和天皇は最高主権者、および軍隊の最高司令官として君臨した。彼らは軍服を着て馬に騎乗し、軍隊を視察した。しかし、それは表面的なものに過ぎなかった。近代の天皇も国の指導者にも統治者にもならなかった。第二次大戦後、こうした表面的な見せかけは剥ぎ取られ、天皇は再び従来の受動的な役割に徹するようになった。そして、このことが最初に憲法に明記されるに至ったのだ¹⁰。

日本における天皇という存在をより深く理解するため、私は天皇とキリスト教との関係、および天皇に対する保守層の批判というあまり知られていない近代的な側面に注目した。天照大神の子孫、そして神道の高位司祭として、天皇はキリスト教と関係を持つことはないと考えられていた。しかし驚いたことに、近代のどの天皇も西洋のこの宗教に関心を抱いていたのである。さらに、大正時代以降には、キリスト教徒であると同時に天皇にも忠誠を誓った者たちが皇居で高い地位に就くようになったのである。連合軍に占領されていた時、ダグラス・マッカーサー将軍は、国民全体をキリスト教に改宗させるための第一歩として皇族をこの宗教に改宗させることを試みた。私が調べてみて分かったことだが、一時期は皇族もこの考えに同調していたという。しかし、最終的にこの計画が実行されることはなかった。日本人には、歴史上の天皇が仏教と神道を融合させたように、現代の天皇がキリスト教と神道を融合させることは不可能ではないと思えただろう。しかし、キリスト教徒の視点に立てば、そうした融合はありえないことだった¹¹。

天皇に対する忠誠が日本人の愛国心の中核を形成しているため、日本の国粋主義者たちが天皇を否定することはあり得ないと思えた。しかし、私が調べたところ、昭和の時代に入ってから保守層の間に天皇に幻滅する感情が芽生えていた。国粋主義者たちは天皇制を崇拝していたが、天皇の座に就く人物について批判的であった。彼らは、昭和天皇が余りにもリベラルな考えを持っていたこと、および腐敗していると考えられる制度を強く支持しているこ

とを糾弾した。1936年に叛乱を起こした青年将校たちは、自分たちの蜂起が失敗した原因は天皇裕仁にあるとした。戦後、作家三島由紀夫は天皇を称え、天皇のために命を捧げるとの考えを表明していたが、天皇を邪悪な助言者たちから解放するために蜂起した理想主義者たちを見殺しにしたこと、そして神としての天皇のために命を捧げた神風特攻隊の人々を裏切ったことについて昭和天皇に幻滅した思いを吐露している。今上天皇ならびに皇太子も、右翼系団体の出版物の中で国家に献身していないとして批判されている。こうした批判が発端となり、日本人の愛国心と天皇とを切り離して考えることを求める声が上がったこともある¹²。

天皇制が左翼の人々から批判され、個人としての天皇は右翼の人々から批判されている一方、一般国民は天皇の存在に無関心でいる。このままでは、天皇制がいつかは消滅してしまう危険性すらある。私は天皇制が消滅したら、それは大きな損失であると考えている。日本のいつの時代にも存在してきた天皇制は、国家としての日本の統一と、分裂を引き起こすことなく外国からの影響を吸収し変化を遂げてきた日本の能力に寄与してきたのだから。

物語性のある歴史を復活させる

私は40年間にわたりこうしたテーマを研究し、日本について教えてきたが、現在この分野で活躍する若い歴史家たちにどのようなアドバイスを伝えることができるだろうか？ まず私なら彼らに、「物語性のある歴史を復活させる」ことを勧めるだろう。かつて、歴史を執筆するには、過去の出来事を読み物として楽しく伝えることが必要で、ちょうど文学を執筆するようなものであった。その後、この作業は科学的な作業となり、過去の出来事を分析し、理論を構築してゆくことが求められるようになった。歴史家は科学的な手法を用いて研究と執筆の活動に専念することを余儀なくされ、歴史という学問は発展を遂げているように思えた。研究者は自分の主張を証明し、検証された資料を根拠とし、自分の仮説内容を数値として表し、情報源を確認し、結

論を導き出し、従来の考えに疑問を投げかけてゆかねばならなくなった。その後、社会科学者たちが登場した。彼らは歴史をケーススタディ（事例研究）の貯蔵庫に作り変えた。理論の構築が最終目標となり、個々の出来事はこれを構築するための材料となった。そしてついに、ポストモダニストたちが登場した。彼らは言語の相対性を証明し、歴史上の真実の有効性を打ち砕いた。

このような発展過程を経て歴史の執筆という分野が確立したが、物語的な歴史の伝達は行われなくなった。歴史から美しい物語が生まれなくなった。今日の歴史書は、過程、原因、および結果により多くのスペースを割くようになり、人物や出来事にスポットライトを当てなくなっている。たとえば1904年から1905年にかけて起きた日露戦争について研究しているとき、私は天下分け目となる戦闘について書かれた歴史書が極めて少ないことに驚いた。まるでそうした戦闘に重要性はないような印象を受けたのだ。しかし、戦闘によって勝者と敗者という最も重要な要素が決定付けられるのである。日本が日露戦争で勝利した理由を説明する歴史家であれば、日本がこの戦争で負けていた場合でもとても雄弁に日本が負けた理由を説明していたことであろう。実際、多くの観測者がロシアの勝利を予想していた。学生と読み手は、確実性がなく、多くが努力と創意工夫によって左右されていた時代の興奮、恐怖、そして苦しみというものを共有するべきなのである。因果関係をあれこれと考察するよりも、戦闘の状況について雄弁に語ったほうが読む者はより大きな興味をかきたてられるのはもちろん、説明を行うことのほうが重要性を持っているのである。

このことは、太平洋戦争について語る場合にも当てはまる。この戦争の原因を知ることは確かに重要である。しかし、何人かの歴史家が主張しているように、そのことだけを考えたのでは1931年の満州事変から1937年の日中戦争、そして4年後の太平洋戦争の勃発に至るまでの直線的な因果関係が見えてこないのである。それぞれの歴史的段階で、数多くの選択肢が存在し、人は決断を下すことを迫られた。当時ほどの選択肢が正しく、また間違ってい

たなどとは知る由もない。太平洋戦争の始まる前と行われている間に、太平洋をはさんで存在する日本とアメリカ両国で人々が体験したドラマや苦しみを見無視しては、この戦争の実像は見えてこない。戦場における残虐行為を伴うヒーローイズム、国内で掲げられた理想主義と熱狂的な愛国主義、占領下の人々が抱いた希望と幻滅、太平洋の孤島で繰り広げられた死闘、整然と進められた日本の降伏といった歴史的な要素が、学生や読み手に全体として示されるべきドラマチックな物語を構成しているのである。

物語性のある歴史を復活させる作業は、歴史を語る上で文学的および芸術的な性質を呼び戻すことに他ならない。歴史は科学の一分野であるばかりか、芸術の一分野でもあり、魅力的な手法を用いて語られるべきなのである。私たちが古事記や日本書紀の物語について話すとき、それらを神話として片付けるだけでは不十分である。私たちはそれらの書物が持つ文学的および文化的な特性について深く考えてみる必要がある。ギリシャ神話であれ日本神話であれ、一笑に付して片付けるべきではない。神話は人類の記憶と想像力の結晶なのである。私たちは欧州の神話を扱う場合と同様の畏敬の念を持ちながら古事記や日本書紀について扱うべきである。物語性のある歴史を復活させる作業は、歴史上の人物に生命を吹き込むことでもある。歴史書では認められていなくても、日本の歴史には魅力的な人物が数多く存在している。私たちはイエス・キリスト、マルティン・ルター、あるいはナポレオンの功績について語るときと同じように、法然、親鸞、豊臣秀吉、徳川家康、あるいは伊藤博文の功績についても語るべきである。

固定観念や誤った比較を避ける

二つ目の助言として、私は「固定観念に気をつける」ことを勧める。西洋人が日本に抱くイメージは、理想郷的な国、メルヘンの世界のような国、あるいは不可思議で非人間的な理解し難い国といった固定観念に支配されている。私たちは固定観念や広く持たれている概念に疑いを持たなければならない。

一人のユダヤ人として、ユダヤ人に対しても同様の固定観念が存在することを
知る私は、そうした固定観念がいかにか誤ったものであるかを理解している。
日本のことについて伝え聞いても、私たちは自らに問わなければならない。
日本人の社会は本当に、常に個よりも集団を優先させる集団主義的な社会な
のか？ 日本人の社会は本当に、横のつながりよりも縦のつながりを重視する
階層的な社会なのか？ 日本人は本当に、他の社会の人々と意思の疎通を図る
ことが苦手な島国的な人々の集まりなのか？ 日本人は本当に、他の社会の
人々と比較して創造性に乏しいのか？ 広く抱かれているこうした固定観念に
ついて、私たちは厳密に調査する必要があるだろう。

ポジティブなものでもネガティブなものでも、誤った固定観念は誤った比較
作業の産物であることが多い。多くの著述家は、日本を奇異で風変わりな国
として映るような方法で日本と外国とを比較している。しかし、彼らは日本
をどの国と比較しているのか？ 一般的に、日本は「西洋」、それも西洋の代
表的な国として「アメリカ」と比較される。しかし、アメリカの社会、政治、
及び文化はヨーロッパの国々のそれとは異なる。ある意味、日本よりもアメ
リカのほうが奇異で独特な国である。日本と同様に封建的で国家主義的な背
景を持つヨーロッパの国々と日本を比較するとき、日本はそれほど奇異な国
としては映らない。礼儀正しさ、権力に対する服従、美的感覚、男性支配、
および名誉の死といった「日本独特」と言われる数多くの特質は、ヨーロッ
パの数多くの国々にも存在してきた。

もう一つの過ちは、一国の理想像を他国の現実と比較する行為である。多く
の西洋人は仕事と義務を献身的に遂行する日本人を見て、日本を調和した一
つの社会として称賛する。なぜなら日本人はそのように見られたいと考えて
いるからである。そして彼らは争い、利己主義、腐敗が横行する自分たちの
現実の社会と日本とを対比させる。同様に、書籍や映画を見て感化され、西
洋社会を称賛する多くの日本人は、非論理性と対立が絶えない自分たちの社
会と異なり、西洋の社会はモラルと合理性を重んじると信じている。そうし
た比較の仕方は誤っている。私たちが日本の理想像と西洋諸国の理想像を比

較してみれば、それらに大きな違いは見られないことに気がつく。同様に、私たちが日本の現実を他国の現状と比較してみれば、思ったほど大きな差が見られないことに気がつく。

専門性の偏重がもたらす危険性

三つ目のアドバイスとして、私は「専門性の偏重を避けること」を勧める。科学には専門性が欠かせないが、芸術の分野では包括的なアプローチが必要となる。かつては一人の歴史家が世界の歴史を一つにまとめる作業をした。現在では、それぞれの歴史家が特定の国の特定の時代の研究に専心し、他の国々や他の時代に起きたことにほとんど注意を払わないでいる。誰かが、例えば日本と韓国の歴史について執筆したのなら、一国の歴史を知るだけでは得ることのできない見識を私たちにもたらしてくれることだろう。日本と韓国は歴史上、似たような状況に置かれることがしばしばあった。しかし、両国の状況への対処のし方は異なっていた。両国とも自分たちの民族的および文化的なアイデンティティは堅持しながら中国文化を吸収した。両国は独自の表音文字を生み出し、これらを漢字と共に使用した。そして両国は植民地主義に対峙し、20世紀中頃には国土が破壊されたが、その後アメリカの保護のもと奇跡的ともいえる産業大国への成長を遂げた。しかし、その後の両国の歩みは異なっている。

現代では純粋な歴史家というものは存在しない。歴史を研究する者は、政治史家、軍事史家、経済史家、外交史家、思想史家、宗教史家、美術史家、文学史家、あるいはそれぞれの研究者が専念する学問分野に関連した歴史家となることが望まれる。それぞれの歴史は交わることのない平行に並べられたトンネルの中を進んでゆくわけではない。過去は一つであり、様々な学問分野が相互に入り混じりながら説明されるべきである。現在では、歴史の調査が実施される場合や、教科書が執筆される場合、様々な学問分野や研究分野の学者が集められ、それぞれの立場から独自の見解を示すことが求められる。

そして読み手がそうした多様な歴史を読み取り、一貫性のある一つの物語を組み立てることが望まれているのだ。しかし、この方法が常に効果を発揮するわけではない。しばしば読み手は、関連性の薄い複数の話から成る断片的な物語を前にして当惑している。

歴史を執筆することは一つの芸術的な作業でもあるため、集団ではなく一人の芸術家としてキャンバスに向かうことがしばしば求められる。歴史家は多彩な学問分野を足がかりにするべきであるが、彼あるいは彼女自身の歴史を構築して示さなければならない。全体像を把握し、読み手に伝えるのが歴史家の役目なのである。これは容易な作業ではないため、実際にこの作業を行うのは、同僚の嘲りを買って自分の経歴に傷が付かないように、正教授に就任するまで待ったほうがよいのだと思う。私自身はあえてこうした作業を行ってしまった。日本の歴史や文化について語るヘブライ語の基本的な歴史書が存在しないことを知り、私は早速二冊の書物を書き上げてしまった。私はこれらの書物の中に、宗教や芸術から経済、戦争、文学、および社会までに至るあらゆるテーマを盛り込もうと考えた。こうしたすべての分野を専門としているわけではないため、誤った情報を含めてしまったり、表面的な説明しか行えなかったりした場合もあったかと思う。しかし、これは自分が描いたキャンバスに他ならない。私は楽しみながら本を執筆し、読み手もまた楽しみながら私の書物を読むことができたと思う。

過去に対する畏敬の念

四つ目のアドバイスとして、私は「過去の時代とそれらの時代を生きた人々に畏敬の念を持つこと」を勧めたい。現代に生きる私たちは、祖先をないがしろにする傾向がある。なぜなら私たちのほうがより多くの情報を持ち、彼らが下した決断と、彼らが知り得なかったその結果について知っているからである。しかし私は、そうした優越感を持つことは誤りであると考え。縄文時代や弥生時代の人々は自動車やコンピュータはもちろん、書き言葉も持

たなかった。しかし、彼らは自分たちの必要性を満たすことのできる文化を生み出した。後の時代の日本人は、当時の文化的な中心国であった中国から遠く離れた島々に住みながらも、高度に発達した中国の文明を採り入れては吸収し、あらゆる分野でそれを凌駕していった。13世紀にはすでに、日本はより良質の刀と漆器を開発することに成功し、それらを当時の中国に輸出している。同様に、20世紀にはより良質の自動車を開発することに成功し、それらの製品をアメリカに輸出している。日本人は過去数世紀にわたり洗練された優れた製品を生み出し、偉大な功績を残しているのである。現代の日本人は、こうした文化的および技術的な功績を残した祖先に誇りを持つべきである。アリストテレスも、レオナルド・ダ・ヴィンチも、シェークスピアも日本人ではないが、紫式部、世阿弥、西行、芭蕉、白隠、北斎といった彼らに匹敵するような偉大な人物が日本にも現れているのだ。

太平洋戦争の間、軍国主義者たちは愛国心を高揚するために歴史を歪曲して利用した。このため、戦後のアメリカの占領政策及び日本の教師たちは日本の歴史について強い批判精神を持つようになった。学校で歴史が教えられる機会は減り、教えられたとしても日本の歴史は暗い過去として語られた。この結果、今日の多くの日本人は自国の本当の歴史についてほとんど知らずに自国の過去を恥じるようになった。日本人は自国のこれまでの歴史の大部分が平和で彩られ、日本が隣国に脅威を与えず、自国の発展のために努力を惜しまなかった国であった事実を知らない。自分たちの祖先の功績を称賛することは他国の功績を軽蔑する行為には相当しない。日本の過去に対してより公平なアプローチを実践することで、現在についてより健全な見方をし、将来についてより楽観的に考えることができるようになるのだと思う。

注釈

¹ Norman Cousins, *The Pathology of Power* (New York: Norton, 1987), p. 7.

² Gar Alperovitz, *The Decision to Use the Atomic Bomb* (London: Fontana Press, 1995), p. 351.

- ³ Dwight Eisenhower, *Mandate for Change* (Garden City: Doubleday, 1948), p. 380.
- ⁴ John Ehrman, *Grand Strategy* (History of the Second World War, U.K. Military Series. London: Her Majesty's Stationery Office, 1956), vol. VI, p. 283.
- ⁵ Ben-Ami Shillony, *The Young Officers and the February 26, 1936 Incident* (Princeton: Princeton University Press 1973.日本語版：『日本の叛乱』、河出書房新社、1975年)
- ⁶ Ben-Ami Shillony, *Politics and Culture in Wartime Japan* (Clarendon Press, 1981. Paperback edition Oxford University Press, 1991.日本語版：ウォータイトム・ジャパン、五月書房、1991年)
- ⁷ ベン=アミー・シロニーとローテム・カウナー共著『100年後の視点から見た日露戦争の記憶と意義』、ローテム・カウナー編『日露戦争再考・百周年の視座』第1巻（Folksotne、英国：Global Oriental、2007年）、P. 1～9
- ⁸ Henry Troyat, *Tolstoy* (New York: Dell, 1969), p. 711.
- ⁹ Ben-Ami Shillony, *The Jews and the Japanese: The Successful Outsiders* (Charles E. Tuttle, 1992.日本語版『ユダヤ人と日本人の不思議な関係』、成甲書房、2004年）、"The Jewish Response to the War," in Rotem Kowner, ed., *Rethinking the Russo-Japanese War, 1904-5*, Vol. 1 *Centennial Perspectives* (Folkestone, England: Global Oriental, 2007), pp. 393-400.
- ¹⁰ ベン=アミー・シロニー著『天皇の謎：日本の歴史における神聖装置』（Global Oriental、2005年。日本語版：『母なる天皇』、講談社、2003年）
- ¹¹ Ben-Ami Shillony, "Conservative Dissatisfaction with the Modern Emperors", in Ben-Ami Shillony, ed., *The Emperors of Modern Japan* (Brill, 2008), pp. 137-162.
- ¹² Ben-Ami Shillony, "Emperors and Christianity", in Ben-Ami Shillony, ed., *The Emperors of Modern Japan* (Brill, 2008), pp. 163-183.